

< 無常 >
— 有限を生きる —

新潟ではシベリアから飛来した白鳥が群をなして飛び、刈り取りを終えた田圃で餌を啄んでいる光景が見られ、冬の到来を実感する季節となりました。

衆議院選挙も終わり新たな国政が始まりましたが、山積した多難な内外の課題解決に向けて本質的な改革を急ぎ進めてもらいたいと願うばかりです。

鎌倉時代、鴨長明によって書かれた「方丈記」に

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。
よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。
世の中にある、人とすみかと、またかくのごとし。」

という有名な一節がありますが、今日、時代の変化が予測不能な途に早く、一人の人間の人生のみならず、世界そして地球環境の変動まで真剣に考えてゆかなければならない時代を迎えています。

そもそも「方丈」とは一丈(約三メートル)四方の室の事で、大風・飢饉などの不安定な世情が続く時代に、日野山に閑居した長明が、方丈の庵での閑寂な生活の営みの中に、人間の窮極の生きる幸せや価値観を見い出して詠ったものだと思います。

しかるに今日の世相を観ていると、企業活動においては自社の利益追求のみに追われる企業も多く、国家の指導者も己の権力拡大の為に世界の秩序をも破壊し、周りの国々や国民を不幸の連鎖に巻き込んでいる事例が後を絶ちません。

こうした独裁者達は果たして自分の権勢そして命が永遠のものと考えているのでしょうか。人も組織も国家も有限のものでしかなく、常に変化し続けて終わってゆくという当たり前の事さえ見失ってしまっている様で、一種の哀れさを感じてなりません。

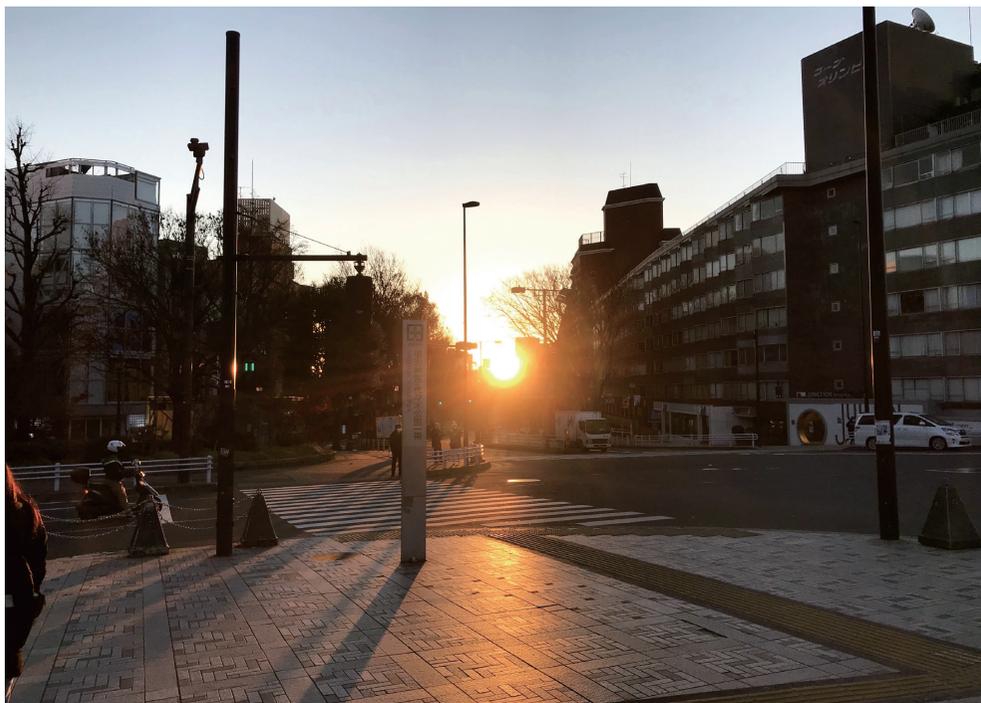
また、人類の豊かさや快適さの追求は地球環境さえも、もはや回復不能に近い段階にまで破壊してきています。我々は有限の人生を生きる中で、常に次世代の事を真剣に考えて生きる人生観を持つ責任が有ると思います。

「生年は百に満たれども、ただ千歳の憂いを抱く」
(人は生きて百年。しかし後に続く世代の事を考えて生きる)

という言葉が有りますが、年をとるという事は次世代への責任を果たすという事ではないかと思えます。

年々、親しい人を亡くす悲しさや寂しさを感じる事が多くなる中で、人生の終わりを考えると共に、この国そして世界の行く末を考える昨今です。

徳真会グループ
代表 松村 博史



東京 表参道 / 冬至の日の出 (撮影: 徳真会グループ代表 松村 博史)



表紙の絵画について
〈 深谷隆司先生 作 〉

松村代表と親交のある深谷先生に「春夏秋冬」の絵を揮毫いただき、徳真会グループのわかば台デンタルクリニックにある絵画ギャラリーコーナーに飾らせていただきました。本号では冬の絵(50号大)を表紙に使わせていただきました。



深谷隆司先生プロフィール

1935年9月29日浅草生まれ 自民党東京都連最高顧問。TOKYO 自民党政経塾塾長。温故知新塾塾長。27歳で台東区議会議員に当選。33歳で都議会議員を経て、37歳で衆議院議員となる。当選9回。郵政大臣(第52代)、自治大臣(第47代)、国家公安委員会委員長(第57代)、通産産業大臣(第64代・65代)、自由民主党総務会長(第39代)、予算委員長、テロ対策特別委員長を歴任。